

# いの流水俳壇

松尾 満津於 選

## 「当季雑詠」

川村 博子

立てかけし鍬がとまり木赤とんぼ  
(評) 江戸中期の人で理知的な句風で、人気があった加賀の千代という女流俳人がいた。その人の俳句の中に「朝顔に釣瓶とられて貰い水」という一句がある。朝起きてみると朝顔の蔓がのびて釣瓶に巻きついている。引き抜くには忍びなく思い、隣家で水を貰った。という句であるが、掲句の作者も心のどこかにそんな配慮があつて、赤とんぼの行動を見ていたのであろう。とんぼの止まる鍬を使うか否かは又別の問題。

大川 節弥

## 音も無く消えし最後の遠花火

(評) 花火は夏の夜空を飾る一大風物詩。吾が家の縁先で打ち上がる花火を見ていたのであろう。何百発か打ち上げられて最後になつた一発。音も出なかつたというのである。殿に上る花火はそれまで活気があり景気よく上つていただけに終了の一発は何となく空しく思える、そしてその残像

が次第に収穫の秋へとつながってゆく。

川村千因子

## 潮騒に誘い込まれし昼寝かな

(評) ありのままの情景を、すらすらと詠んで説明の要らない句である。作者は潮騒とは縁遠く住み、作者の年令から推察して、昼寝しているのは孫或はそれに類する年令の子供であらうと推察する。海水浴に遊び疲れて昼寝している、潮の満ちて来る波のリズムが、眠りを誘い、テントの蔭の中で、安堵する寝姿を想像させられる句。

伊藤 たみ

## 羅や黒ひといろにあるけじめ

(評) 薄絹織物で作った夏用衣服が羅であるが、黒ひといろとあるから喪服を連想するが、下五に「あるけじめ」と云い止めたところから、この羅は単純に喪服を詠んだものではなく、なからうと考える。「けじめ」は行動、態度などにつける区別であり、その場になつた節度のある対応である、黒の羅を着こなせる女は、そうザラに居るものではない。要するに容姿端麗で立ち振る舞いに透きのない人のことを詠んだものであろう。

渡辺万利子  
絵馬灯笼百の願いや夏まつり

(評) 絵馬灯笼が夏まつりの境内から姿を消して久しい。戦後半世紀を経てようやく復古の兆を見せはじめ、新旧取り交えて宮の境内を飾っている、もともと豊作を祈願する意味での灯笼であつたが、現在は交通安全、家内安全、入学、男女交際、就職等世相に副った願いが画かれている。それが百の願いであるのだ。単純に在りのままを句にしたところに好感がもてる。

竹崎 光子

## 山住みの無限にひたる星月夜

間 浩太  
妻看んと職捨てし友銀河濃し

片岡 包女  
退院の殊に青田の新しき

友草 水月  
わらび餅半透明の秋の立つ

松岡きよ子  
禅寺の藪にしろじろ夏椿

川上こよね  
頭陀袋持たぬ僧衣の晩夏光

岡本とも子  
プールより出たがらぬ子を掬ひけり

津田久美  
つばくらめ蜻蛉の列をくすしけり

中屋 桜子  
燃え尽きし天地の影や涼新た

川村 愛  
山路ゆく風に光に秋近き

広瀬うき子  
絵便りのスイカ二切れ涼もらう

藤田 里野  
初盆や百四才の亡母の顔

筒井 眉躬  
緑濃き山路を歩くすがすがし

楠目 哲郎  
木いちごをつつむ藤の葉うす緑

中野 好子  
めぐり来し神話の里もせみ時雨

石川 笑子  
六十年想いをこめて焚く門火

筒井 文  
迎え火に昔の人ぞ惚ばるる

松尾満津於  
天辺の猿は余裕の毬を刺く

次題「当季雑詠」五句  
締切 毎月 15日

## 投句先

吾北教育事務所  
いの町上八川甲2010  
☎86712133

